

遊びのスクランブル交差点 (2)

「おやすみです」の多い おみせやさんごっこ

仲 明 子

◇「おやすみです」の多いおみせやさんごっこ

我が家の六畳で、昨冬遊ばれた「おみせやさんごっこ」は、まず、テーブルを広げておみせをつくり、その上におもちゃを並べて、二枚の看板、「〇〇やさんです」・「おやすみです」をつくることで始められた。

けれども、各々のおみせにまず出されたのは、「おやすみです」の看板だった。そして、その「おやすみです」のなんと長いこと。

おみせやさんごっこなのに、どうしてこんなに「おやすみです」が多いのだろうか。

子どもたちが、この遊びを「おみせやさんごっこ」と名付けたとき、私がこの遊びに抱いたイメージは、お金を持って売り買いするもので、おみせが開いていることを前提にしたものだった。

だから、私には「おやすみです」では「おみせやさんごっこ」はまだ始まっていることにはならないように思われた。

けれども、子どもたちの様子を見ると、「おやす

みです」もおみせやさんごっこの中のうちのようなのである。

彼らは、この遊び——「おやすみです」の多いおみせやさんごっこ——の中で、どんなことを楽しもうとしたのだろうか。

それを、まず、彼らと私の「おみせに抱くイメージ」のずれを手がかりに、彼らにとって、なぜ、おやすみが多くてもおみせやさんごっこなのかを探ってみようと思う。

つぎに、その「おやすみです」の各々のおみせの中で、彼らがどんなことを楽しんでいるのかをのぞいてみようと思う。

そうすることで、彼らにとって、なぜこの遊びにこれだけ多くのおやすみを採り入れることが必要だったのかを、探ることができるのではないかと思われる。そして、それは、この遊びがさらにメンバーに共有される遊びとなっていく過程をみることもなろう。

◇「おみせ」のイメージ

(1) Nの場合

朝、兄の登園を送って駅への道を急ぐ

N おかあさん きょうは くすりやさん おやすみ？

私 うーん まだ 開いていないだけよ。くすりやさんのおばさんも きつと 自分のおうちで 朝ごはんを食べているのよ。

N ふーん。

駅からの帰り道、開いているおみせの前で

N おかあさん きょう くすりやさんで 何か買うも

のなーい？

私 きょうは……ないわね。

N 寄りたいなー。

この二つが薬屋さんの前を通るとき、何回ともなくかわされるNと私との会話である。

薬屋さんには子どもの喜びそうなものがたくさん用意されている。うさぎ、ぞう、かばのマスクット、ときにはアンパンマンの人形、トンボのバッジや花火、ふうせん、鉛筆……。Nは今日は何がもらえるだろうとワクワクしておみせの入口に入る。Nにとって、薬屋さんはそんなおみせである。

買い物に行く大人とは違い、Nにとって関心があるのは、自分にも関心を示してくれ、何かおまけをくれるおみせである。

ところが、そのおみせには定休日もあるし閉店時間もある。そして、開店時間より閉店時間の方が長いのである。だから、Nがシャッターの降りているおみせの前でガックリすることは案外多い。

大人である私は「お店」とは開いていて買い物ができる状態のことであり、閉まっている状態では建物ではあっても「お店」ではないと思っていた。

けれども、Nにとって「おみせ」とは、開いていることも閉まっていることもあるけれど今日はそのどちらだろ

うと思いつながら通りかかるものであり、（そこまで行ってみて）開いていたら何かがもらえるが閉っていたら何ももらえないものである。

このように、開いていてあたりまえと思っている私と、開いているのも閉まっている（『おやすみ』ののもどちらもおみせの姿と思っているNとでは、おみせに抱くイメージが随分違っていることに気づかされるのである。

すると、六畳に集まった子どもたちが、おみせに「おやすみです」の看板を出して、おみせやさんごっこを始めたとしても不思議ではないように思われた。

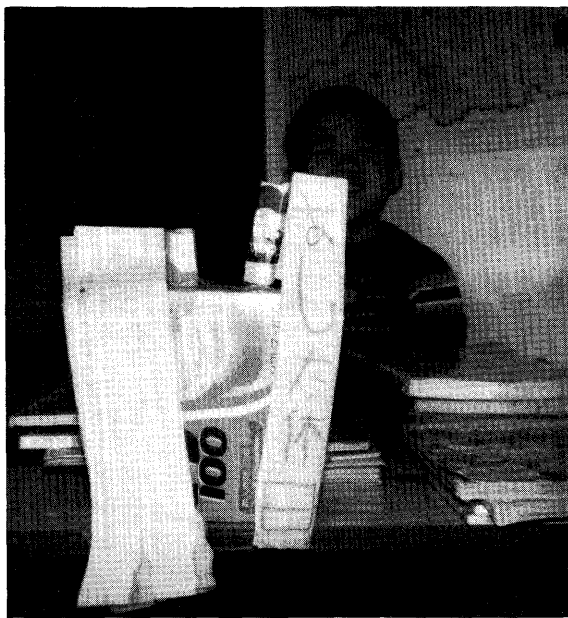
(2) Lの場合

私はNやCに求められるままに、「おやすみです」の看板を書きながら、どうして、この看板をつくるのだろうか、なぜ、この看板がかかれるほどに、子どもたちにとって「おやすみです」が重要なのだろうか、と不思議に思ってみていた。

そもそも、この「おやすみです」の看板は、おみせや

さんごつこの始まった日に、本屋さんになったLのテーブルの上に置かれたものに由来している。(写真)

この日、Lは本をテーブルの上に並べ終わると、開店するのではなく、空き箱置き場からマーガリンの空き箱



▶「あしたは金よう日だから　ほんやさんおやすみだよ」

を持って来た。そして、何やら一生懸命づくり始めたのである。

まわりで自分のおみせづくりをしていた他の子らも私も何ができるのか興味深く見守った。そして、おやすみをみんなに知らせる立て札とでもいふべきものができ上がったのだった。(図1)

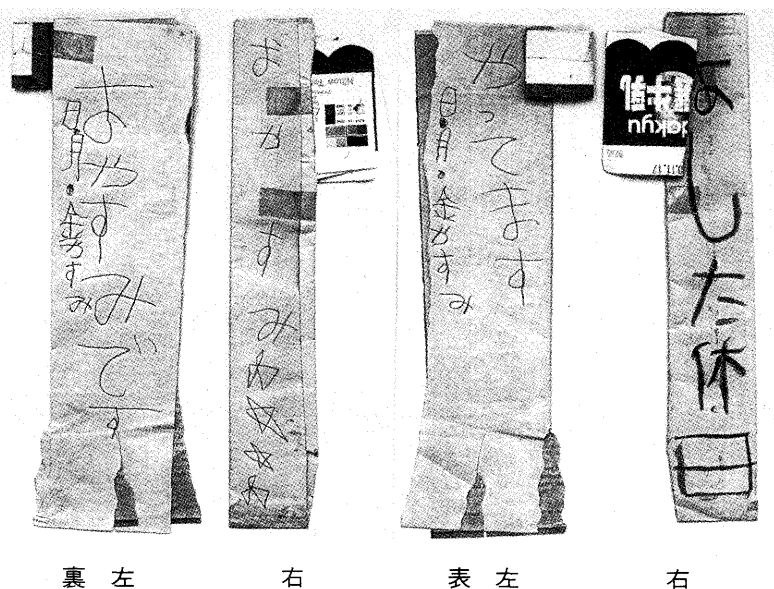
Lは、その立て札の表裏左右の四カ所のいずれにも「やすみ」の文字を入れて「おやすみ」について知らせている——「やってます」(表)にも、「おやすみです」(裏)にも「日・月・金やすみ」が付されている——さらに、「あした休日」だけは赤いクレヨン(他は鉛筆)で太く力強く大きく書くという念の入れようである。

それを見た私は、それは、Lにとっておやすみがそんなに大事なことの現れであろうと思った。

Lが思うおみせとは一週に四日開いて三日が休みである。なんと休みが多いのであろう。

けれども、まわりで見守っていた子どもたちは、誰一人Lにそのおやすみの多さについて疑問も異論も唱えな

◀ 図1 Lのほんやの立て札



- 裏左 右 表左 右
- かった。それどころか彼らは、早速、紙と鉛筆を持って来て、各自のおみせに出す立て札を各々工夫してつくり始めたのである。
- こうして、おみせにはおやすみがあがり、それをみんなに知らせたいというLの立て札は（看板に姿をかえて）他のメンバーにも受け入れられたのである。
- そして、ついに、共通の看板「おやすみです」が「○やさんです」に並ぶものとしてどのおみせの前にもはられることになったのである。
- 私は、これは彼らがおみせに抱くイメージ——おみせにとって、おやすみは開いているときと並んで大事なものである——の現れであると思った。
- では、彼らは「おやすみです」のおみせの中で、どんなことを楽しんでいるのだろうか。各々のおみせの中のぞいてみることにしよう。
- ◇ 「おやすみです」のおみせの中
- (1) 準備を楽しむ

れすとらん NとCは「れすとらん」の準備をしている。ま

まことの棚から食器をお盆に載せてつきつぎに運んで来る。

電話、レジも置く。そして、準備が整うと、「おばちゃん

れすとらん あいたよ 来て。」と別室にいる私は、お客と

して呼ばれるのである。

「おみせやさんになる」とは、自分の好きなおもちゃを一種類選んでそれをその日一日独占することとも言える。NとCは毎日のように遊んでいるままこの道具を棚から出して来て、テーブルの上に並べる。それをするのが三歳児の二人にはすでに遊びである。

さらに、れすとらんを開いて、私を呼んで一緒に遊ぼうと思っている。だから、その準備も楽しみにいそいそと行われるのである。

(2) 自分のイメージを追求することを楽しむ

あめだまや あめだまやだったその日、Lは半裁の紙を持ち

出して来て、鉛筆で左すみから書き始めた。1コ50円・2コ

100円・3コ150円……えんえんと書き続ける。あめ一つ分の50

円ずつ足していく。Lにはそれがおもしろい。「何？」と他

の子がのぞきに来る。……8コ400円 とうとう紙が足りなく

なる。そこで、セロファンテープで右側に別の紙をつぎ足し

てさらに続く。9コ450円……14コ700円。やっとLのイメージ

したあめだまやの値段表ができ上がったらしい。もう少しで

五時になる頃、Lのあめだまやは開店した。(図2)

くすりや Lの値段表づくりを見ていたTは、くすりやにな

ったその日、Tのイメージする値段表をつくった。それは

薬ビンの絵と値段の数字を並べたものだった。でき上がっ

て、「くすりや あいたよ。」とTが叫ぶ。まわりにいた子が

やって来て、絵と品物を見比べる。日頃、「おいしやさん

ごっこ」で使われるそれらの中には、聴診器や救急箱、水枕

にアルコールやカルシウムなども混じっていた。(図3)

鉛筆で文字や数字を書くことは、入学前の五歳児にとって新鮮なことである。そのことがすでに一つの遊び

あめだま

1	50円	5	2	50円	10	50円	10	50円
2	100円	6	3	00円	11	5	50円	
3	150円	7	3	00円	12	600円		
4	200円	8	4	00円	13	650円		

▲図2 Lのあめだまの値段表

▼図3 Tのくすりやの値段表

10000	10000	10000	10000
500	3000	1000	1000
500	1000	1000	1000
1000	1000	1000	1000
1000	1000	1000	1000

なのである。

TとLは三年半にも及ぶ遊びを通して、六畳にあるおもちゃもお互いによく知っている。けれども、二人でいることで互いに刺激され、毎日の遊びに新しさを生み出して来た。

その日も、LはLらしく計算をしながら値段表づくりを始めた。すると、隣のテーブルでは、TはTらしく絵と数字を使って値段表をつくった。Tはてきばぎと。Lはじっくりと。早速開店したT。納得がいくまで自分の

イメージを追求しているL。そこには互いにかかわりを持ちながらも、Tの楽しみがあり、Lの楽しみがある。

とりわけ、Lのおみせは「おやすみです」のことが多い。本屋の立て札づくり、あめだまやの値段表づくりのように。Lはそれに没頭している。それは別の遊びと言った方がいい。

けれども、まわりの子らはそれをせめるでもせかすでもない。「あめだまやはどんな風になるのかな。」と興味深く見守り「あいたよ。」の声のかかるのを心待ちにしているのである。

(3) 安心に支えられて自分らしさを楽しむ・それを見せる

おりがみや Oのおりがみやは昨日までは、おりがみを色とりどりに並べて売っていた。今日は、つるを折って売るという。しばらくして行ってみると、三羽のつるがテーブルの上に並んでいた。まだ、「おやすみです」。

OはNと遊ぶ妹のCと一緒にこの秋頃から六畳に来るようになった。まだこの部屋にも、Nの兄であるLやその友人Tともなじみが薄い。(このTとOの六畳での出会いが私にスクランブル交差点を連想させた)その上、男兄弟がいないのでこのように男児と同室で遊ぶことも珍しい。けれども、まだなじみの薄い彼らとは、テーブル一つ隔てていることで安心感に支えられている。

Oは自分が好きで得意な折り紙のおみせを選び、昨日まではただ並べることが楽しみだったおみせづくりも、今日はつるを折って売ろうとしている。五歳児にとって「つる」を折ることは難しい。Oにとってそれは十分な楽しみであり、一つの遊びである。

「おやすみです」は、おみせやさんごっこの遊びの中にOの楽しみ——折り紙を折る——を可能にした。Oはテーブル——安心基地——の中にあって折り続ける。彼らとおしゃべりに花を咲かせながら。彼らの視線を体に十分感じながら。

OはそんなOらしい自分の姿をTやLにも見せることができた。また、彼らが彼らしく店づくりを楽しんでいる姿をテーブル越しに見ることもできた。

私はこの互いの自分らしく遊ぶ姿をテーブル越しに見ることは、スクランブル交差点に遊ぶ彼らにとっての「かわり」ある遊びの始まりであり、彼らがこの遊びの中で一日一日なじんでいく過程でもあるように思われた。

それは彼らがこの遊びの中に「おやすみです」の看板を採り入れたことで可能になったのだと思う。

*

このように、「おやすみです」のおみせの中では、各自が思い思いに開店の準備をしている。それは、早くおみせを開けて売ることを楽しみたいと、並べることに忙しいおみせがある一方で、その準備がいつ終わるともわからないおみせもあるのである。

彼らには「おやすみです」の看板を出していることで

この遊びのメンバーであるという安心感がある。その安心感に支えられているからこそ、じっくりと各々の自分の楽しみを追求することができたのである。

私はこのテーブルの中のひとりひとりの違う楽しみに出会うとき、まず各々の安心基地とも言えるテーブルの中で自分のやりたいことを十分にやり遂げることで、メンバーのひとりとして自信を持って自分らしくかわって遊ぶことができるのだと思う。

「おやすみです」の看板は、おみせやさんごつこの遊びの中にあって、そんなひとりひとりの楽しみ（別の遊び）を可能にしたのである。そして、彼らが互いのそれをテーブル越しに見る機会をも保障したのである。

それは、彼らが互いになじんでいく過程としても必要なものであるように思われた。

（舞々同人）